

### 登壇者プロフィール

#### 総合司会



#### 松本 陽子

NPO法人 愛媛がんサポート おれんじの会  
高校3年生のときに父親をがんで亡くし、その後33歳のときに自身が子宮頸がん罹患。2008年、愛媛でがん患者と家族の会を設立し翌年にNPO法人化。愛媛県からの委託を受けて、仲間と共にピアサポート事業などに取り組んでいる。  
一般社団法人全国がん患者団体連合会理事、緩和ケア委員会委員長。

#### 開会挨拶



#### 島田 和明

国立がん研究センター中央病院長  
1982年京都府立医科大学卒業後、東京大学医学部第2外科に入学。1990年から国立がん研究センター中央病院肝胆膵外科医として従事、1000例以上の肝胆膵外科手術を行う。2020年4月から同病院院長に就任。AMED革新的がん医療実用化研究事業にて、肝胆膵外科領域の研究開発「根治が見込めるがんに対する外科侵襲の軽減とQOL改善を目指した標準治療法確立のための多施設共同第三相試験」の研究を実施。

### 体験談：がんを抑えるため。とはいえ痛い！手足症候群



#### 櫻井 公恵

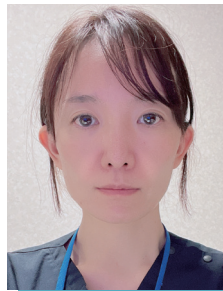
NPO法人 GISTERS

2004年配偶者が38歳の時に希少がんGIST(消化管間質腫瘍)に罹患。聞いたことのない病名に戸惑い、インターネット掲示板での仲間との交流で支えられる。GIST・肉腫患者と家族の会「GISTERS」は2006年に任意団体として発足し、2013年に法人化。全国の仲間と共にGIST治療の開発促進を目指し、勉強会やセミナーを開催している。

### 研究成果報告：抗がん剤で生じる手足症候群に対する予防的なケアを考える (J-SUPPORT 1701)

#### 〈研究概要〉

抗がん剤で生じる皮膚障害の一種である手足症候群は痛みを伴うため、日常生活に支障を来すことがあります。そのため、予防目的で抗がん剤の治療開始時に手足症候群が出やすい部位に保護材を貼って様子を見たところ、保護材を貼ることで手足症候群の出現を遅らせたり、症状を抑えることがわかりました。



#### 柳 朝子

国立がん研究センター中央病院 看護部  
がん看護専門看護師

愛媛大学医学部看護学科を卒業後、神戸市立医療センター中央病院、四国がんセンターで看護師としての臨床経験を経て、東京慈恵会医科大学修士課程でがん看護学分野を専攻し、がん看護専門看護師の資格を取得する。2014年からは国立がん研究センター中央病院看護部でがん看護専門看護師として臨床に従事すると共に、支持療法領域で皮膚障害に対するケアの研究に医師らと共に取り組んできた。



#### 桜井 なおみ

一般社団法人 CSRプロジェクト

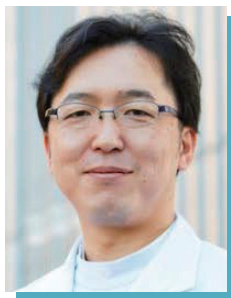
大学で都市計画を学んだ後、卒業後はコンサルティング会社にてまちづくりや環境教育、費用対効果などの業務に従事。2004年、乳がん罹患後は、働き盛りで罹患した自らのがん経験や社会経験を活かし、小児がんを含めた患者・家族の支援活動を開始、現在に至る。一般社団法人CSRプロジェクト代表理事、カンサーソリューションズ(株)代表取締役社長、NPO法人HOPEプロジェクト理事長として活動。技術士(建設部門)、社会福祉士、精神保健福祉士、産業カウンセラー。



#### 高島 淳生

国立がん研究センター中央病院  
消化管内科 腫瘍医

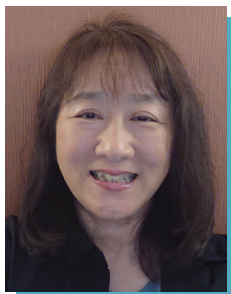
2001年滋賀医科大学医学部医学科卒業。2004年より国立がんセンター中央病院 内科レジデント、消化管内科がん専門修練医。2009年より国立がんセンターがん対策情報センター 臨床試験支援部 / 医学統計室長 / JCOG運営事務局 研究支援部。2012年より国立がん研究センター中央病院 消化管内科に勤務。2017年より現職。消化管がんに対する薬物療法を専門とし、臨床・研究に従事している。



## 全田 貞幹

J-SUPPORT 支持療法・緩和治療グループ チーフディレクター

2000年防衛医科大学校卒、2014年東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科修了、医学博士。2006年から国立がん研究センター東病院放射線治療科勤務。2020年より支持・緩和研究開発支援室長を兼務。2015年より国立がん研究センター中央病院支持療法開発部門を兼務し、2019年より支持療法・緩和治療グループのチーフディレクターを務める。専門は放射線治療、頭頸部がん、支持療法。



## 西田 久美子

女性のがん 当事者会 つばなの会 (京都府立医科大学附属病院)

学校法人燈影学園 一燈園小学校教頭

企業主導型保育事業 燈影ホームガーデン副園長

2018年に乳がん罹患。早期緩和ケアを受けがん患者にはサポートが必要と思い、医療者の協力を得て2019年に「つばなの会」を立ち上げる。HBOC (遺伝性乳がん卵巣がん症候群) 当事者。教師としてがん教育にも取り組んでいる。



## 東 くるみ

乳がん患者会 あげぼの会 香川支部代表

がん患者ネットワークかがわ 会計

2012年に乳がんの告知を受ける(ステージ3)。1回の抗がん剤でほぼ緩解状態となり、2022年ひと通りの標準治療を経て治療終了。2012年に乳がん患者会「あげぼの会」入会。福利厚生担当から副代表を経て代表者となる。2022年ピアサポーター登録。趣味は抗がん剤治療中の女性に寄付するための「ケア帽子作り」。患者会のための健康料理教室の講師もしている。

## J-SUPPORT 成果のまとめ



## 内富 庸介

国立がん研究センターがん対策研究所 / 国立がん研究センター中央病院 支持療法開発部門長 / J-SUPPORT 代表

1984年広島大学医学部卒。88年国立呉病院・中国地方がんセンター精神科医師としてがん患者の精神的ケアに携わり、91年米国スロンケタリングがんセンター記念病院で精神的ケアについて研修。93年広島大学医学部神経精神医学教室に転任し、がん患者のクオリティオブライフ(生活の質、生命の質)に関する医学教育に従事。95年国立がんセンター精神腫瘍学研究部の創設に携わる。2010年4月より岡山大学精神医学教授、2015年1月より国立がん研究センターに復帰。生命の危機に伴う抑うつ対策とその機序解明、そして生命に向き合う精神医学の教育研修を使命とする。専門は、がんの診断後に生じる落込みや不安のケア。日本サイコオンコロジー学会副代表理事。

## 閉会挨拶



## 中釜 斉

国立がん研究センター理事長

1982年東京大学医学部卒。1990年同大学医学部第三内科助手。1991年から米国マサチューセッツ工科大学がん研究センター・リサーチフェロー。1995年以降国立がんセンター研究所発がん研究部長、生化学部長、副所長、所長を歴任。2016年4月より国立がん研究センター理事長・総長。ヒト発がんの環境要因、及び遺伝的要因の解析とその分子機構に関する研究に従事してきた。分子腫瘍学、がんゲノム、環境発がんが専門。

開催日時: **2023年10月15日(日) 13:30~16:30**  
申込先: こちらのリンクからお申込みください  
<https://ws.formzu.net/fgen/S170552891/>  
※お申込み締切: 2023年10月1日(日)



【主催】 J-SUPPORT 日本がん支持療法研究グループ  
【共催】 一般社団法人 全国がん患者団体連合会、  
SaQRA 日本がんサバイバーシップ研究グループ  
【運営支援】 キャンサー・ソリューションズ株式会社